

指導変革の軌跡

No. 301

教師たちの創意工夫や挑戦
そして改革への情熱を描く

進路指導改革

生徒が自己のあり方・生き方に 向き合える進路指導に転換

富山県立高岡高校

1分で分かる軌跡

富山県立高岡高校は、将来就きたい職業や志望校を軸とした進

路指導を転換。進路行事を見直すとともに、課外活動への参加を促し、社会を知ることによって生徒のキャリア観を広げる取り組みを2025年度から推進している。生徒は多様な刺激が得られる課外活動に価値を見いだし、2年次4月までに半数以上の生徒が参加。それらは生徒にとって自己のあり方・生き方を考える機会となり、「もっと学びたい」といった思いが芽生えたことで、難関国立大学志望者が増加している。

#進路指導の転換 #進路行事の大幅な見直し

変革の背景

職業・大学ありきの進路選択に、
教師が疑問を抱くように

難関国立大学や医歯薬学系学部・学科を志望する生徒が多い富山県立高岡高校では、それらの希望進路を実現するための進路指導が1年次から行われてきた。将来就きたい職業や志望大学・学部を明確にし、その希望進路の実現に向けて学習にまい進させるといったのがこれまでの指導の基本方針だった。しかし、社会の変化が激しい現代において従来の進路指導のままでよいのかといった思いが徐々に生じていったと、進路指導部副主任の川腰達也先生は語る。「文理選択においても、医師になりたいから理系、国家公務員や弁護士になりたいから文系というように、自分が

知っている職業が選択の軸になっていました。しかし、生徒が知っている職業は限られます。社会の変化に合わせて広い視野で自分の将来を主体的に考えてほしいと思うようになりました」

同校は「ふるさとに誇りと愛着を持ったグローバルリーダー」を育成すべく、「新たな時代に対応し、未来を切りひらく人間力」の伸長を教育目標として掲げている。それに鑑みても進路指導を見直す時が来ていたと、人文社会科学科主任の阿尾圭悟先生は語る。

「先行きが見通しにくい時代においてキャリア形成の軸となるのは『自分は何が得意で、何に価値を見いだし、どのように社会にかかわりたいのか』といった、個人の譲れない価値観や能力です。大学・学部選択の手前にある自己理解に、生徒がしっかり取り組めるようにしたいと考えるようになりました」

変革の一手

キャリア観を広げるため、
課外活動の参加を促す

そうした思いの下、2025年度の1年次の進路指導は、志望大学・学部を決定することよりも、生徒が社会を広く知することに重点を置くことにした。25年度入学生の学年主任を1年次から務める中野亜紀子先生はこう説明する。「以前は入学直後から、『東京大学や京都大学、医学科に合格するためには1年生では平日3時間、休日5時間の家庭学習が必要だ』といったことを繰り返し伝えていました。その方針を転換し、学年集会などで具体的な大学名や職業名を挙げることはせず、生徒が特定の大学や職業にとらわれないようにすることを目指しました。生徒には

学校概要

設立 1898 (明治 31) 年

形態 全日制／普通科、探究科学科(理数科学科・人文社会科学科)／共学

生徒数 1学年約 240 人

2025 年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、東京科学大、東京大、富山大、金沢大、京都大、大阪大、九州大などに181 人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ 475 人が合格。



校長
亀谷卓朗
かめたに・たくろう
同校に赴任して2年目。



進路指導主事
山本祐子
やまもと・さちこ
同校に赴任して14年目。
英語科。



企画研究部主任
北美知代
きた・みちよ
同校に赴任して14年目。
地歴公民科（公民）。



進路指導部副主任
川腰達也
かわこし・たつや
同校に赴任して10年目。
地歴公民科（日本史）。



企画研究部
人文社会科学科主任
阿尾圭悟
あお・けいいち
同校に赴任して10年目。
国語科。



2学年主任
中野亜紀子
なかの・あきこ
同校に赴任して4年目。
英語科。

『社会を知って、将来を考えるきっかけにしよう』と呼びかけ、年1回以上の課外活動への参加を促しました」

進路行事も見直した。例年9月に行っていた予備校の講師などによる進路講演会は6月に前倒しし、大学入試制度などへの理解を深めるといったそれまでの内容も変更。東京大学の天文学の研究者に、学問や社会と自身のつながりをテーマに語ってもらった。

さらに7月の職業理解講座を「キャリアプランニング講座」に刷新。従来は弁護士や医師など、各分野で活躍している卒業生約10人を迎え、生徒は自分が興味・関心を持っている分野を2つ選び、少人数で話を聞く形だった。それにより、選んだ分野への理解が深まる一方で、話が聞ける分野は限られるため、生徒の視野を十分に広げられているとは言いが難かった。そこで新たな講座は、キャリアを豊富に積みつつ、今後の人生設計についても語れる30〜40代で、経歴の異なる卒業生3人にキャリア形成の経緯や考え方を語ってもらい、生徒

全員が聞く形にした。講座を企画した川腰先生は人選にこだわったと語る。

「本校では女子生徒の半数が理系を選ぶものの、理工学系学部に進学する生徒はわずかです。そこで理系の職業をイメージできるように、東京大学を卒業後、製造業の開発職に就いた女性に講師を依頼しました。さらに、マルチステージの働き方のモデルとして、京都大学を卒業してから東京で複数の職業を経験した後、富山県にUターンした女性と、一方で1つの仕事を続けるモデルとして、富山大学薬学部を卒業後、地元の病院に勤務する男性薬剤師にも講師をお願いしました。生徒がキャリア観の多様さに気づくよう、自身のキャリアの選択について率直に語ってほしいと3人に伝えたところ、3人とも趣旨に共感し、依頼を快諾してくれました」

進路指導部の賛同を得て、 進路行事を変更

「進路行事を変更したい」という中野

先生と川腰先生からの提案に、進路指導主事の山本祐子先生は賛同した。

「医師や薬剤師を目指す生徒に理由を聞くと、大半が『人を救いたい』『人の役に立ちたい』と言います。その志は法律や福祉などの仕事でも実現できるはずですが、ほかの職業に目が向かない生徒に以前からもどかしさを感じていました。進路行事の刷新は生徒のキャリア観を広げる好機になると考え、進路指導部として了承しました」

校内の手続きとして、管理職と各分掌部長、各学年主任から成る「校務運営委員会」に進路行事の変更を提案すると、「今まで通り、生徒が志望する医師や弁護士などの職業に就いている卒業生を招く方がよいのではないか」「1年生全員が一斉に話を聞く形では、職業への理解が深まらないのではないかなどと、変更の効果を疑問視する声が少なからず出た。それに対して中野先生と山本先生は、社会の状況を踏まえると生徒がキャリア観を広げることが重要であると丁寧に説明したところ、

先行きが見通しにくい時代だからこそ、
進路選択の手前にある**自己理解**に向き合わせたい

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

図 2025年度1年次の進路指導

教師の
思い

職業・大学ありきの進路選択ではなく、自分の興味・関心や得意をどのように社会に生かせるか、社会にどう貢献できるかという視点で自己のあり方・生き方を考えてから進路選択をしてほしい。

新しい取り組み	課外活動の年1回以上の参加	学校に届いたワークショップやボランティア、コンテストなどの情報は必ず生徒に告知。Google クラウドにも情報をアップし、生徒がいつでも閲覧できるようにした。
	課外活動参加報告会の実施	1年次12月と2年次4月に、課外活動に参加した生徒が活動内容や学んだことなどを発表。
	他県の高校生と模擬試験の振り返り会	国語・数学・英語の模擬試験の振り返りを、京都市立堀川高校の生徒とオンラインで実施。例えば数学は、再現答案をそれぞれで採点し、採点の観点を出し合った。

見直した取り組み	旧 進路講演会	9月に、予備校の講師などによる大学入試の制度や心構えなどに関する講演を実施。
	新 進路講演会	6月に、東京大学の天文学の研究者が自身の研究内容に加え、学問や社会と自身とのつながりをテーマに語った。
	旧 職業理解講座	医師や弁護士、公務員、金融、IT、エンジニアなど、各分野で活躍する卒業生が、仕事内容ややりがいなどを語る。生徒約20人のグループで、講師と生徒が対話。
	新 キャリアプランニング講座	経歴が異なる3人の卒業生が、高校・大学時代から現在の職業までの道のりや、自身の人生観・キャリア観を語った。

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

最終的に進路行事の変更は承認された。そうして実施されたキャリアアップランニング講座では、前述の講師3人が高校時代から今までの道のりをそれぞれ語った。質疑応答では、「高校生や大学生の時に今の道に進むと思っていたか」「今の生き方を決めた瞬間はあったのか」といった質問が生徒から上がった。「Uターンした女性性は『大学の時点では今の仕事は想像もしていなかった』と明かし、開発職の女性性は『今の仕事は楽しくてやりがいもあるが、これだと思える仕事にはまだ出会えていない』と率直に語ってくれました。一方で薬

剤師の男性は『薬剤師になると決めて薬学科に進学し、今がある』と答えていました。そのように、キャリアの形成は三者三様でしたが、生徒にとっても教師にとっても、キャリア観を深く考える機会となりました（中野先生）。生徒の感想には「様々なことに興味があるのなら、必ず正社員にならなければいけないということではなく、途中でキャリアの方向性を変えながら、より自分らしい道を模索してもよいのだと気がついた」「将来、何になりたいのか分からないからこそ、選択の幅を広げるために勉強を頑張ろうと思った。

卒業生が語ったキャリア観は、生徒が自己のあり方・生き方を考える出発点となった

夏休みに自分が興味を持てるものを探したい」といった声が見られた。「同講座は生徒が自己のあり方・生き方を模索していく出発点になったと捉えています」（川腰先生）

他校の生徒との交流や課外活動の報告が大きな刺激に

課外活動の中でも生徒が大きな刺激を受けるのが、他校の生徒との交流だ。例えば25年度に、愛知県立旭丘高校主催の「グローバルサマースタ」に参加した1年生4人の様子を、企画研究部主任の北美知代先生はこう語る。

「東海地方のSGH（※1）の高校が集まる同フェスタに、指定校だった本校も16年度から参加しています。本校とは環境が異なる他校の生徒とともに「グローバルリーダーとは何か」という問いを考える活動を通じて、生徒は多様な視点を得ます。今年度は、フェスタで刺激を受けた生徒が『日本の次世代

考える出発点となった

リーダー養成塾（※2）などに参加し、さらに見聞を広げようとしています」さらに新たな試みとして、京都府・京都市立堀川高校とオンラインで模擬試験の振り返り会を25年12月と26年3月に実施した。国語・数学・英語で行い、例えば数学では、再現答案をそれぞれで採点し、採点の観点を出し合った。

「1回目に参加した10人の生徒全員が2回目も参加しました。生徒主体で学び方を学ぶ活動に取り組む堀川高校の生徒（※3）は、同じ問題でも多様なアプローチで解法を考え、自分の課題を明確に言語化していました。本校の生徒はその姿に自分との力の差を感じ、伸ばすべき力を自分なりに考えたようでした」（川腰先生）

校内でも生徒同士で刺激し合えるように、自分が参加した課外活動について発表する「課外活動参加報告会」を25年12月と2年次の26年4月に実施した。各回とも30〜40人の生徒が自身の経験を語った。報告会後に実施したア

※1 文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」。高岡高校は2014〜18年度に指定校だった。

※2 自治体と経済界が連携し、全国の志の高い高校生約150人を対象に、日本や世界を舞台に挑戦する人材の育成を目指したサマースクール。

※3 堀川高校が行う、生徒主体で学び方を学ぶ活動「学びのアセスメント」については、本誌2022年10月号の特集「高大接続の視点で見通す2025年度大学入試」で紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」（https://cdn.view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article12772/）、または右の2次元コードからアクセスしてください。



変革の軌跡を振り返って



経験が浅いからこそ学年団で目線を
合わせ、**同じスタンス**で生徒を支援

中野先生

本校赴任4年目の私は、周りの先生方と相談しながら学年主任を務めてきました。進路指導の転換については反対意見も出ましたが、生徒に一番近い学年団が捉えた生徒の姿と私たちの思いとのギャップを率直に話し、進路指導部を含め、最終的には校内の合意を得られました。改革は進行中ですが、英語ディベート大会での完敗をバネ

に次の大会に向けて早くから自主練習に励んだり、「トビタテ！ 留学JAPAN」に多くの生徒が挑戦したりするなど、その意欲的な姿に確かな手応えを感じています。そうした生徒を2年次にどのように伸ばしていくか。学年団でコミュニケーションを取る中で、私と同じく本校の赴任歴が浅い先生方が指導の進め方に苦慮していることが分かりました。週1回行う学年団の定例会は日々の業務の話が中心になりがちなので、2年次進級時に指導の目線合わせをする場を設け、本校での指導経験が豊富な川腰先生に指導の留意点を語ってもらいま

した。また、生徒に高い志を持ってほしいという願いや、3年次までに生徒に志望大学・学部を決めさせなければならないという焦りから、面談などで職業や大学ありきの声かけにならないようにすること、そして志望大学・学部は決定後も変えてもよいというスタンスをいま一度確認し合いました。課外活動は書類の準備などで教師にかかる負担もありますが、生徒が審査を通じて海外に留学したり、大会に入賞したりすると、それは大きな喜びに変わります。生徒がキャリアアビジョンを着実に描けるよう、新たな進路指導に磨きをかけていきます。

変革の成果と展望

学年団の改革を 学校全体の改革につなげる

26年度の2年次4月時点で、それまでに課外活動に参加したことがある生徒は5割を超えた。部活動などもある中で、複数回参加する生徒も少なくな

ンケートには「課外活動は普段かかわることがない人たちと交流でき、視野が広がると分かった」「一歩踏み出してみようと思った」といった感想が寄せられ、「今後も課外活動に参加したい」という回答は9割に上った。

い。一方で、全く参加しない生徒もいるが、「参加したいという気持ちがない」「参加する意味はない」と、無理に参加する必要はないことを伝えている。2年次の目標は年度末に行う「キャリアアビジョン宣言」だ。従来の志望理由書の作成に代わって、将来の自分がありたい姿とその実現のために目指す大学・学部、その大学・学部の合格に必要な学習戦略について、2〜3月に書き表すことを生徒に説明し、「漠然とした状態でもよいから、自分自身に向き合って考えよう」と伝えた。そして学年団では、「志望大学・学部の決定は急かさず、1年次に引き続き、生徒が自己のあり方・生き方を考えられるように寄

り添う」という方針を改めて確認した。今後は現2学年団の進路指導改革（図）を全校へ広げていく考えであり、26年度の1年次も「キャリアアプランニング講座」の実施を計画中だ。進路指導と探究活動との連携も検討している。「ここ数年、探究活動の進め方を見直したことで、生徒が自身の興味・関心や社会課題に深く向き合えるようになってきました。そうなる生徒は、自己のあり方・生き方を見いだしていきます。そのように、探究活動がキャリアアビジョンにつながるような働きかけをもっとしていきたいと考えています」（阿尾先生）

生徒の主体性の向上は希望進路にも表れ始めている。「教師が特に大学名を言わなくても、様々な刺激を受けて意欲的になった生徒は、おのずと高い目標を意識するようになります。結果として、2年生の難関国立大学の志望者は例年以上のペースで自発的に増えています」（川腰先生）同校の学校づくりについて亀谷卓朗校長は次のように語る。「若手教師が増える中、指導が着実に継承されるよう、各学年の副主任を進路指導部の配属とする組織改革を行いました。各学年の挑戦を次の学年が引き継ぎ、さらに磨きをかける。その積み重ねを通じて、学校全体でグローバルリーダーを育てていきたいと思っています」

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

Web VIEWnext ONLINE

関連記事はこちら！

今回のテーマに関連する過去の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。

2023年8月号 指導変革の軌跡 宮城県・私立仙台北城南高校

▶ https://cdn.view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article16617/

